

事後評価報告書(日本-韓国研究交流)

1. 研究課題名:「Toll 様受容体による菌体膜脂質認識における構造と機能の相関」

2. 研究代表者名:

2-1. 日本側研究代表者:東京大学 医科学研究所 教授 三宅 健介

2-2. 韓国側研究代表者:韓国科学技術院 准教授 Lee Jie-Oh

3. 総合評価: (B)

4. 事後評価結果

(1)研究成果の評価について

TLR4/MD-2 に焦点をあて、構造と機能の相関について韓国と日本が役割分担を行い、リガンドと TLR4 の構造的認識と生物学的相関を明らかにする方向で研究が進んでいる。免疫応答とリガンド結合の観点から、新しい知見も得られている。しかし、本研究交流の期間内における日韓双方の研究進展を見ると、日本側は優れた成果を挙げているが、韓国側の構造解析の成果が明確ではなく、研究目標に照らしてやや遅延しているように思われる。

(2)交流成果の評価について

セミナーやシンポジウム等を通し、若手を含めた研究者の交流が行なわれ、分子構造学と免疫学という異なる分野の意見交換がなされた点は有用であった。しかし、もう少しシニアレベルの研究者を主体とした交流もあった方が、研究推進への良い効果が望めたのではないだろうか。一方、本研究交流に特化した日韓ワークショップ等が開催されていないのは残念である。また、相互訪問の日程が接近していることも、より効果的な交流成果を狙うという観点から改善した方が良いと思われる。

(3)その他(研究体制、成果の発表、成果の展開等)

研究の分担体制は日韓で良く組織化されている。しかし、韓国側が担当する研究が時間を要する内容であったことが、研究成果の共同発表を遅延させた一因かと思われる。研究成果を共著論文として出来るだけ早く発表することが求められる。若手研究者の相互間交流を今後も継続し、本研究交流の成果がエンドトキシンショックの病態解明や新たなワクチン開発に発展することを期待したい。